
投影法の内容分析

—ロールシャッハ・テスト—

関西大学大学院心理学研究科心理臨床学専攻
寺嶋繁典

◆要約◆

従来、投影法の内容分析は形式分析と同様に、重要な結果の整理方法と考えられてきた。しかし内容分析は特殊な能力を有する一部の臨床家が行う名人芸という認識が定着し、結果の信憑性に疑義の表明されることが少なくない。この背景には内容分析の方法や訓練の方式が一定でなく、専ら臨床家個人に委ねられていることがある。内容分析からクライアントに有用な情報が得られることは、熟練した臨床家なら誰しもが経験的に理解していることである。パーソナルコンピュータの普及による形式分析偏重の昨今、内容分析の定式化を改めて模索する必要がある。本稿ではロールシャッハ・テストを中心に内容分析を体系的・段階的に行う手順を提示するとともに、初心者への技能訓練の方法について述べる。

キーワード：内容分析、投影法、ロールシャッハ・テスト

はじめに

ロールシャッハ・テスト、描画テストや文章完成法（以下SCT）は、クライアントの無意識領域を含むパーソナリティを幅広くとらえる投影法としてしばしば用いられている。投影法の結果の解釈は形式分析と内容分析によって行われる。形式分析とは各テストの指標の数量化による量的分析方法のことであり、内容分析とは臨床家の高度な専門知識や豊富な臨床経験を用いて、反応内容や言語表現を直接的に解釈する質的分析方法である。いわば前者は投影法のサイエンスとしての側面を有し、後者はアート（名人芸）としての役割を担っている。両者をバラ

ンスよく用いることで被検者のパーソナリティに関する多彩な情報を得ることが可能となる。しかしパーソナル・コンピュータ（以下PC）の急速な普及によるのか、最近では量的分析に拠った投影法の所見を見る機会が増えているように思える。これはPCの普及だけが原因ではなく、①内容分析には検査者の主観の混入が否めないことや、②内容分析の方法自体が明確でなく、③技能を習得するための個人指導を長期間受けなければならないことなども関係している。今後も量的分析偏重の傾向はますます強まり、反応内容や言語表現の特徴からしか得られない質的情報の欠落が懸念される。投影法には絵画統覚テストやSCTなど、内容分析に拠らざるを得

ないテストもあり、心理臨床の専門家としては形式分析だけでなく、内容分析の技法を習得する必要がある。本稿ではロールシャッハ・テストを中心に、内容分析を体系的・段階的に行う手順を提示し、同時に、技能訓練の方法についても述べる。

投影法における内容分析の必要性

近年、考案された Exner 法では記号化の方法がより厳密に規定され、各種指標の量的分析を中心に結果の整理と解釈が行われている。記号化に基づく量的分析はロールシャッハ・テストの結果の客観性を担保するための重要な方法で、心理臨床の専門家はまず形式分析の技法を完全に習得する必要がある。ただ残念なことに現状の方式ではプロトコルに含まれるすべての情報を記号に変換できず、形式分析を補完する方法が必要となる。表 1 に示したロールシャッハ・テストのⅢ図版に生じた二つの反応は、領域が W で、決定因子が M、反応内容が H で、両者とも同一の記号が付与される。同じく表 1 のⅧ図版の反応には D、FM、A という同一の記号が付与される。記号化の手続きではⅢ図版の反応の「楽しそう」「深刻な」、Ⅷ図版の「イヌが登る」「ヒョウが狙う」などの内容的な相違は区別されない。経験豊富な臨床家なら、各々の解釈が異なることは容易に想像できる。おそらくⅢ図版の反応①は協調的な人間関係を示し、反応②は人間関係の緊張を示すと解釈されるかもしれない。またⅧ図版の反応①に比して、反応②には被検者の攻撃性が示されていると解釈されるであろう。このように内容や言語表現の分析からも、パーソナリティに関する重要な情報を得る可能性がある。ただしクライアントに有用な内容分析を的確に行うためには、①内容や言語表現から信憑性の高い情報を収集するための方法の明確化や、②内容分析の技能をどのような訓練により養うのかなどといった課題も多い。

表 1 言語表現と記号の例

Ⅲ図版 全体

①：「人が二人で楽しそうに話をしています」
W、M、H

②：「人が二人で深刻な話をしています」
W、M、H

Ⅷ図版 両側のピンク色の部分

①：「イヌが坂を登っているところです」
D、FM、A

②：「ヒョウが獲物を狙っています」
D、FM、A

内容分析の手続き

ロールシャッハ・テストの内容分析を適切に行うためには、このテストに関する深い理解はもとより、精神分析学や精神医学などの多彩な専門知識が必要となる。またプロトコルに出現する反応内容に対して、日本人がどのようなイメージを抱きやすいのかといった一般常識的な感覚や偏らない価値観も併せて備えている必要がある。内容分析を行おうとする臨床家には、スペシャリストとジェネラリストの両面の素養をバランスよく備えていることが重要となる。

さて、内容分析は反応内容の象徴的解釈によると考えられがちであるが、独特の言語表現や反応の時系列的な分析によっても重要な情報が得られる。また内容分析を漠然と行うのではなく、一定の手順に従って体系的に行うことも結果の信憑性の向上に重要である。この観点から、本稿では従前の内容分析の方法を再検討し、①ショックの分析、②反応の継起分析、③言語表現の分析、④象徴的分析の 4 軸による包括的な内容分析の方法について提示する。

Axis 1：ショックの分析

被検者は図版のインクプロットの形態、色彩や濃淡などの特徴からさまざまな刺激を受け、

これらに反応する。ときには被検者がインクプロットの強い刺激を処理しきれずに反応を拒否する場合がある。これは「ショック」と呼ばれる現象で、始発反応時間の極端な遅延や反応数の急激な減少などの形でも出現する。ショックは図版の構造的特性が被検者に情緒的な混乱を引き起こした結果として出現すると考えられており、ショックの性質の理解は内容分析においても重要である。以下に、各図版に生じやすいショックの性質と、その解釈仮説について述べる。

【I 図版】 I 図版は無彩色図版で、中央に4カ所の空白部分が存在する。ほとんどの被検者にとってI 図版は初対面の図形で、I 図版への反応は新しい場面に直面したときの被検者の行動様式を示すと考えられてきた。この図版のショックは、新奇な場面での不安や緊張を短時間で緩和し、気分を安定させることができにくかったり、不慣れた作業へのとりつきが悪かったりする傾向を示す。

【II 図版】 II 図版はコントラストが目立つ黒色と赤色の彩色が施されており、被検者にとってこの彩色は強い情緒刺激となる。II 図版のショックは色彩によるもので、これを示す被検者は、外界からの強い情緒刺激のもとで動揺しやすい傾向を示すと考えられている。

【III 図版】 III 図版は赤色と黒色の有彩色図版であるが、大半の被検者はII 図版で赤色刺激に順応するために、II 図版ほど強い色彩ショックを受けることはない。むしろIII 図版のショックは図版の両側に知覚される「人間」によると考えられている。対人関係の葛藤から生じる不安や緊張、あるいは敵意などの否定的な感情を抑圧している被検者が、III 図版の「人間」の知覚によって動揺し、無意識裡に避けようとする結果、ショックを生じると考えられている。

【IV 図版】 IV 図版は無彩色図版で、濃淡が目立つことから「毛皮」などの反応を生じやすい。また三角錐様の形態は権威的あるいは大きいというイメージを与え、「大男」や「大木」などの反

応を生じやすく、父親図版と呼ばれてきた。IV 図版のショックは、このような印象から生じるとされ、権威像あるいは父親との葛藤を示唆すると考えられている。

【V 図版】 V 図版は無彩色図版で、「コウモリ」や「チョウチョウ」などが、比較的明確に知覚されるためにショックを生じにくい。この図版のショックは、以前の図版で生じた動揺が収まっていなかったり、極度の不安状態や思考障害のために刺激を統覚できなかったりする傾向を示すと考えられている。

【VI 図版】 VI 図版は無彩色図版で、楽器に似た形態を有していることから「ギター」や「三味線」などの反応が多く、また濃淡から「動物の毛皮」なども反応されやすい。一方、インクプロットの中央には「男性器」や「女性器」を連想させる形態が知覚されることから、VI 図版は性図版と呼ばれてきた。異性との性的葛藤を抑圧していたり、性の役割についての悩みを有していたりする被検者は、性器の知覚にとらわれて著しく動揺し、ショックを示しやすいと考えられている。

【VII 図版】 VII 図版は無彩色図版で、インクプロットの上部が女性の横顔に似ていることから「女性」や「女の子」などの反応が多い。また「優しい」や「かわいらしい」というイメージを与えることから母親図版と呼ばれてきた。VII 図版のショックはこのような印象から生じ、母親や女性との間の葛藤を示唆すると考えられている。

【VIII 図版】 VIII 図版はIV 図版からVII 図版の無彩色図版の直後に提示される有彩色図版であり、ショックは色彩から生じると考えられている。しかしVIII 図版はパステルカラーを中心に穏やかな彩色が施されており、またインクプロットの両側に明確な形態の動物が知覚されることから、色彩による動揺は少ないとされている。したがってVIII 図版で色彩ショックを生じる被検者は、些細な刺激によっても情緒の安定を失う傾向にあると考えられる。

【IX 図版】 IX 図版はVIII 図版に続く有彩色図版で、

形態が曖昧で最も意味づけしにくく、健常者でも反応時間の遅延を生じやすい。Ⅸ図版のショックは刺激の統覚ができにくい傾向を示唆するが、他の色彩図版のショックと同様の意味を有するかどうかについては慎重に検討する必要がある。

【X図版】X図版は有彩色の小部分から構成されており、「昆虫」や「魚」など小部分への意味づけはしやすいが、図版全体への意味づけはきわめて難しい。この図版のショックは、小部分の分散による全体への意味づけの困難さや色彩によると考えられるが、Ⅸ図版と同様に、この図版のショックに関しては他の反応内容との関連性を考慮しながら解釈する必要がある。

Axis 2：反応の継起分析

プロトコルへの反応の時系列的な順序を追体験的に検討することによって、被検者の関心や興味の方角、あるいは防衛機制の働き方などに関する情報を得られる場合がある。例えば下記に示したⅠ図版の例で被検者Aは、最初にP反応の「コウモリ」を答え、続いて「真ん中に女の人」「動物の顔」を反応しており、いずれもⅠ図版に出現しやすい内容である。この被検者は新しい場面に直面しても動揺することなく、冷静に対処できることを示している。一方、被検者Bは最初に「目の鋭い仮面」と答え、続いてP反応の「コウモリ」や「動物の顔」を反応している。Ⅰ図版の「仮面」自体は希な反応ではないが、「目の鋭い仮面」という反応が最初に出現することは少ない。この被検者はⅠ図版を提示された直後、鋭角の四つの空白部分にとらわれて、「鋭い目」という緊張感や心の動揺を示す内容を答え、その後「コウモリ」や「動物の顔」というP反応を答えている。この反応の継起は、被検者が「鋭い目」によって動揺しながらも、短時間で落ち着きを取り戻しP反応を答えたという心理的過程を反映している可能性がある。ただ被検者Bがなぜ最初に「鋭い目」とらわ

れたのかに関しては、後述の象徴的解釈で検討する必要がある。

Ⅰ図版	被検者A	被検者B
	①「コウモリ」	①「目の鋭い仮面」
	②「真ん中に女の人」	②「コウモリ」
	③「動物の顔」	③「動物の顔」

Ⅱ図版の例で被検者Aは、「動物2匹」「人が手を合わせている」「真ん中がロケット」の順に、良形態の一般的な反応を安定して答えている。これに対して被検者Bは、Ⅱ図版の赤色の刺激にとらわれて「怪我した」という表現を用いており、情緒的な動揺が伺われるが、2番目の反応以降は「2匹のクマ」「ロケット」という良形態の反応が続いている。この被検者は赤色と黒色の激しいコントラストに動揺して「怪我」という反応を思わず答えてしまったために、自己の内面を知られることへの不安や恐れが高まり、「2匹のクマ」や「ロケット」という一般的な内容によって防衛しようとした可能性が考えられる。

Ⅱ図版	被検者A	被検者B
	①「動物2匹」	①「おばあさんが怪我をしている」
	②「人が手を合わせている」	②「2匹のクマ」
	③「真ん中がロケット」	③「真ん中がロケット」

Ⅶ図版の例で、被検者Aは三つの良形態の一般的な反応を答えている。これに対して被検者Bの、最初の二つは被検者Aと同じであるが、三つ目の反応は「中世の王様の顔」というⅦ図版では珍しい不良形態の反応を回答している。被検者Bは新奇場面では防衛や警戒心から一般常識的な行動（良形態反応）を示すものの、緊張の緩和とともに自分なりの解釈（不良形態反応）によって外界を認知しやすい傾向を示すのかもしれない。

Ⅶ図版	被検者A	被検者B
-----	------	------

- | | |
|----------------------|----------------|
| ①「女の子」 | ①「女の子」 |
| ②「キンギョ」 | ②「キンギョ」 |
| ③「下のところがチヨウ
ウチヨウ」 | ③「中世の王様の
顔」 |

Ⅷ図版の男性の被検者の例では、最初に「花」「ヒヨコ」を反応した直後に「噴火」「クロヒヨウ」を答えている。「花」「ヒヨコ」など弱いものを反応した後で、被検者は自分の弱い面を他人に知られまいとして、反動形式的に「噴火」「クロヒヨウ」といった強く激しい内容を反応したのかもしれない。

Ⅷ図版 男性の被検者

- ①「花」
- ②「ヒヨコ」
- ③「噴火」
- ④「クロヒヨウ」

このように被検者の知覚を追体験的に分析することによっても、被検者の行動様式の理解につながる情報を得る可能性がある。なお反応の継起に関する解釈を、一つの図版の順序性から

だけで決めるのは危険であり、他の図版にも同様の順序性が重なって出現するかどうかを検討して解釈することが重要である。このことは後述の言語表現の分析や反応内容の象徴的解釈にもあてはまることである。

Axis 3：言語表現の分析

かつて Rapaport や Watkins やらは、ロールシャッハ・テストにおける精神疾患患者の言語表現を分類し、疾患群に特有の言語表現を見いだしている。表2は Rapaport の逸脱的言語表現の一覧である。

逸脱的言語表現の他にも、ロールシャッハ・テストには被検者のパーソナリティを反映するさまざまな言語表現が出現する。表3の例1の被検者Aは「コウモリ」に見えることを明確に表明しているが、被検者Bは「～のような感じがします」という断定を避ける表現を用いている。このような表現を多用する被検者は、自信欠如で物事の決定に慎重である可能性が考えられる。

表2 Rapaport による逸脱的言語表現

空想化反応 (fabulized responses)	関係付け思考の言語表現
空想化結合反応 (fabulized combinations)	(verbalization of reference ideas)
作話反応 (confabulations)	自己関与的言語表現
混交反応 (contaminations)	(self-reference verbalizations)
自閉的論理 (autistic Logic)	不合理反応 (absurd responses)
特異な言語表現 (peculiar verbalizations)	荒廃色彩反応 (deterioration color responses)
奇妙な言語表現 (queer verbalizations)	厳密な言語表現 (exactness verbalizations)
曖昧な言語表現 (vagueness)	批判的言語表現 (criticism verbalizations)
混乱反応 (confusion)	ことばによる攻撃 (verbal aggression)
支離滅裂な言語表現 (incoherence)	攻撃反応 (aggression responses)
象徴反応 (the symbolic response)	自己卑下の言語表現
対称性に関する言語表現	(self-depreciation verbalizations)
(the symmetry verbalization)	感情的表現 (affective verbalizations)
関係付け言語表現 (the relationship verbalization)	マスターベーションに関する言語表現
	(masturbation verbalizations)
	去勢に関する言語表現 (castration verbalizations)

表3 言語表現の例

例1	
被検者A	「これはコウモリに見えます」
被検者B	「これはコウモリのような感じがします」
例2	
被検者A	「気味悪そうな色が広がっています」
被検者B	「楽しそうで好きな絵です」
例3	
被検者	「コウモリじゃないと思うけどな」

例2の被検者Aの表現は図版への感想として述べられたもので、「気味悪そう」という感情があらわれている。また「楽しそうで好きな」という被検者Bの表現にも、個人的な好みや感情が表現されている。これらの言語表現を用いやすい被検者は、物事に対して感情優位の接近方法をとったり、物事を好き嫌いによって判断しやすかったりする傾向を示している。例3の被検者は「～じゃないと思うけどな」という表現を用いて「コウモリ」を反応している。「～じゃないと思うけどな」のような表現は、内面を知られまいとする用心深さや警戒心の強さ、あるいは他人の評価を気にして決断ができていく傾向を反映している可能性がある。このように表現形式の分析からも情報を得ることができ、逸脱的言語表現とともに、語尾や図版への感想なども内容分析の対象となる。ロールシャッハ・テストの施行時には、すべての言語表現を逐語的に記録するのが望ましい。

Axis 4：反応内容の象徴的解釈

象徴的解釈は、反応内容に固有の象徴性を精神分析学、臨床経験、および一般的なイメージなどの観点から、直接、解釈する方法である。これは勘に頼る解釈であってはならず、一定の枠組みのなかでいつも同じ視点からの解釈が行われなければならない。象徴的解釈を行うにあたり、重要となる四つの視点について述べる。

(1) 反応内容の種別ごとの象徴性

反応内容の種別ごとの象徴性を解釈する方法であり、形式分析でも取り上げられる。例えば動物反応の極端な多さは、無難でありふれた考え方をしやすい傾向を示し、「建物」「橋」「城」などの建物反応は男性的で力強いものへの高い関心を示している。一方「花」「葉っぱ」などの植物反応は依存的・受動的な被検者に生じやすいとされている。

(2) 反応内容の固有の象徴性

同一種別の反応内容であっても、各々の象徴性が異なる場合がある。例えば「ヒョウ」と「ナメクジ」は動物反応に分類されるが、「ヒョウ」は一般的に攻撃性や活動性の高い動物として認識され、「ナメクジ」はエネルギー水準の低い弱小の存在としてのイメージがあり、両者の象徴性は異なっている。また「スーパーマン」と「サターン」はともに想像上の人物に分類されるが、前者は人類を救うヒーロー、すなわち善の象徴であり、後者は恐怖をもたらす悪の象徴としてのイメージが強い。反応内容に固有の象徴性について解釈を行うことは、内容分析においてきわめて重要な手続きであり、象徴性に関する知識や、反応内容の一般的なイメージに関して普段から理解を深めておくことが重要である。

(3) 種別の異なる反応内容に共通する象徴性

反応内容の種別が異なっても、共通した象徴的意味やイメージを有する反応内容が存在する。例えば「ゆりかご」「口を開けているコウノトリ」「牛乳瓶」「子宮」「ビスケット」などは、各々の種別が異なっても、依存欲求や愛情欲求の象徴としての共通性を有している。内容分析を行うにあたり、共通の象徴性についても検討する必要がある。

(4) 修飾された反応内容の象徴性

「獲物を求めて飛んでいるコウモリ」と「重い羽を下ろしているコウモリ」とでは、同じ「コ

ウモリ」という内容でも、両者の解釈は異なる。例えば前者は「獲物を求めて飛ぶ」という表現からみて、目標達成への欲求や攻撃欲求の存在が伺われる。一方、後者は「重い羽を下ろした」という表現からみて、意欲や活動性の低下を示している可能性がある。また「ライオン」は権威で強者の象徴であるが、「王冠をかぶったライオンがうなだれている」という言語表現からは、強いものが疲弊している姿を連想させる。

このように、反応内容がさまざまな言語表現によって推敲されている場合には、固有の特性に推敲内容を加味して解釈を行う必要がある。

象徴的解釈における反応内容の意識水準

心理アセスメントでは質問紙法が意識水準の内容を測定し、投影法が無意識水準の内容をとらえたとされている。しかし描画、特に人物画などでは、被検者の抱いている拒否感や疎外感を「横向きの人物」として意識的に描かれる場合がある。この傾向はロールシャッハ・テストでも同様であり、内容分析を行うにあたり、反応内容や言語表現の意識水準を考慮しなければならない。例えば「傷つけられて、血が流れています」という反応では、「傷つけられる」という表現により被害感を率直にあらわしており、被検者自身は自分の被害感に気づいている可能性が高い。これに対して「虫に食べられて穴の空いた葉っぱです」の反応では、「虫に食べられて穴の空いた」の象徴的な意味を被検者が知らない限り、この表現が被害感を投影しているという意識はないであろう。したがって前者は意識水準の被害感を、後者は無意識水準の被害感を示している可能性がある。このようにロールシャッハ・テストのすべての反応が無意識を象徴しているとは限らず、反応内容や言語表現の意識水準を考慮しながら解釈を行う必要がある。

内容分析の結果の整理方法

内容分析から得られる情報は多種多様で量も多く、これらのなかから被検者に有益で信憑性の高い解釈仮説だけを、どのように抽出するかが課題となる。以下に、内容分析における結果の整理方法について述べる。なお、ロールシャッハ・テストの初心者が内容分析を行う場合には、(1) 繰り返しあらわれる解釈仮説を基本的に結果の整理を行い、熟練するにつれて(2)～(4)の方法を用い、最終的には(5)反応の直感的選択も加味して整理を行えるようにしたい。

(1) 繰り返しあらわれる解釈仮説

反応内容や言語表現の分析によって繰り返し出現する解釈仮説を、所見に掲載する事項と考える整理方法である。例えば、反応の語尾に「～かもしれません」などの表現を繰り返し用い、かつ「クラゲ」「海草」などの弱々しい反応内容が重複して出現する場合に、これらの解釈仮説である自信欠如や決断力の乏しさなどの事項を重要とする考え方である。

(2) 独創的反応

Ⅱ図版の左側(あるいは右側)に「人」や「動物」は多数の被検者が答える反応であり、これらの反応から被検者の独自性を知ることは難しい。しかしⅡ図版の同領域でも「そびえ立つ塔」はきわめて希な反応であり、この領域になぜこのような独特の反応を答えたのかを分析することは、被検者の特性を知る重要な手がかりとなる。希な、あるいは独創的な反応に関連する解釈仮説を重要とする考え方である。

(3) 感情移入の原理

Ⅲ図版で「人が話している」に比して「人が興奮して言い争っています」の反応には被検者の感情移入が目立ち、後者の被検者が人間関係における緊張を伝えている。他にも「つらそうに見える」「寂しい感じの絵」「明るく楽しそう

などの感情移入の目立つ表現も、被検者のパーソナリティの一端を投影している可能性があり、これらを重要とする考え方である。

(4) 推敲された反応

「コウモリ」という単語だけの反応に比して「コウモリです。羽がしわになり、透けて見えていて、ぶら下がるための爪もここにあります」の反応はコウモリをより詳細に説明しており、この反応への被検者の関心の高さが伺える。反応の目立った推敲は、その反応への被検者の興味や関心の高さを示すものであり、これらに関連する解釈仮説を重要とする考え方である。

(5) 反応の直感的解釈

我々は特定の事象への学問的・職業的関心を長期に持ち続け繰り返し実践することによって、通常は区別し得ない些細な刺激をも正確に弁別する能力を獲得することができる。ロールシャッハ・テストに習熟することで、被検者にとって重要な反応や言語表現を直感的に見分けて解釈することにより、量的分析では得にくい被検者に個有の重要な情報をプロトコルから読み取ることが可能である。しかし直観的解釈は結果への検査者の主観の混入といった問題を生じかねない。直観的解釈を適切に行うためには豊富な臨床経験とともに、継続的なスーパーヴィジョンやピア・ヴィジョンが必要である。

内容分析における留意点

(1) 被検者の属性

正確な内容分析を行うためには、被検者の年齢（発達段階）、性別、職業、学歴などの属性を考慮する必要がある。例えば、IX図版の全体で「女性の子宮に見えます」という反応が、20歳代の若年女性に生じた場合は、出産への関心や不安と解釈されるかもしれない。しかし同じ反応が閉経をとともなう更年期の女性に生じた場合には、発達段階からみて女性性喪失への不安な

どと解釈されるかもしれない。またIV図版で「大男が仁王立ちしている」という反応が男性に生じた場合は、自己顕示性や権威的態度と解釈されるかもしれないが、女性の場合は異性への恐れや嫌悪と解釈されるかもしれない。

(2) 限界質問を利用した被検者独自のイメージの理解

I図版の「ハロウィンのお面」という反応について限界質問段階で説明を求めたところ、ある被検者は「子どものお祭りで楽しそう」と答え、別の被検者は「お面の目が怖そう」と答えた。元来ケルト人の伝統行事であったハロウィンに関して日本人は、その由来を十分に理解していないのか、ハロウィンへのイメージが人によって異なるようである。またVIII図版の「森の向こうにお城が見えます」やX図版の「シワの多い老人」などへのイメージも、被検者によって異なる可能性がある。これらの反応に関しては、限界質問などを利用して被検者のイメージを確認することが重要である。

内容分析のスキルアップのためのトレーニング

内容分析を適切に行うためには、投影法、精神分析学、および精神医学などに関する専門知識と同時に、一般常識をバランスよく備えている必要がある。また内容分析のスキルアップには継続的なスーパーヴィジョンが欠かせない。しかし初歩的訓練にはBlind AnalysisやOver Interpretationなどを用いたグループワーク、およびピア・ヴィジョンも有用であろう。以下に初心者の訓練方法について述べる。

(1) グループワークによる内容分析のスキルアップ

グループワークには5名～6名の初心者に加えて熟練者が指導者として参加する。参加者はI図版の第1反応からショック、反応内容の象徴性、言語表現などAxis 1～Axis 4に関する各自の解釈仮説を考え、その後、各自の解釈仮説を順次発表していく。この際に事前に考えた

解釈仮説を、他の参加者が先に述べた場合には、可能な限り別の解釈仮説を即座に考えて述べるように努力する。この方法は解釈仮説を柔軟かつ迅速に見出すための訓練として有用である。さらに参加者は各自の解釈仮説だけでなく、他の参加者の解釈仮説も記録し、前述の結果の整理方法にしたがって所見に掲載する事項を取捨選択し文書にまとめる。その後、各自の文書を公表し、内容や文章の読みやすさなどについて相互に確認し、有用な所見についての理解を深める。

(2) Blind Analysis

内容分析の訓練では、対象となる練習用のプロトコルの背景などの情報を全く知らされずに解釈仮説を考案するのが望ましい。さまざまな情報が事前に知らされていると、これらの情報を頼りに解釈仮説を見出そうとしがちで、反応内容自体の解釈のためのスキルアップにつながりにくい。なお、臨床現場で Blind Analysis を行うことは極めて危険であり、面接や他の心理テストなどの情報を考慮して行わなければならない。

(3) Over Interpretation

内容分析では解釈仮説を見出すために、専門知識、臨床経験、一般常識を駆使しつつ、想像力や推理力を働かせることが求められる。これらの能力を養うためには、反応内容への過度な解釈を自由に行い、その解釈の妥当性について参加者間で討議する方法が有用である。例えば「豪華なバラの花」は美しく華美な印象をもたらす、周囲の注目を得る欲求を示すと解釈される。しかしバラには棘があることから、他人を寄せ付けまいとする深層心理の象徴という解釈を加えると、この反応は被検者の対人関係における両価感情を示すという、少し過度な解釈ができるかもしれない。なお反応内容への過度な解釈はトレーニング時に留めるべきである。

おわりに

内容分析の研修を重ねるたびに、同一の反応内容に対する参加者の解釈は一致していく。これは内容分析の訓練により、反応の解釈の仕方が一定になること、すなわち評定者間信頼性が高まることを示している。投影法の内容分析は名人芸であるという認識が定着しているが、訓練しただいで、信憑性の高い情報を引き出す能力を培うことが可能であろう。内容分析は反応内容や言語表現のパターン認識に基づく、ある種のアルゴリズムを用いて行われているように思われる。このアルゴリズムを定式化できれば、より有用な内容分析が可能となり、効率的な訓練方法の開発にもつながるであろう。

文 献

- 片口安史 (1987) : 新・心理診断法、金子書房。
Rapaport, D., Gill, M. & Schafer, R. (1980) : *Diagnostic psychological testing*. New York, International Universities Press.
高橋雅春、北村依子 (1981) : ロールシャッハ診断法Ⅰ、サイエンス社。
高橋雅春、北村依子 (1981) : ロールシャッハ診断法Ⅱ、サイエンス社。